令和4年度　学校評価　自己評価（教職員による評価）

資料 4

自己評価方法について

1 年度当初に部署・担当（各部・学年・教科など）ごとに本年度の実践目標を立てる。
2 目標に沿った取組を展開する。必要に応じて軌道修正をしながら取組を進める。
3 年度末に部署・担当ごとに成果をまとめる。
4 成果を踏まえながら、全教職員による評価を行う。
それぞれの実践目標に対して、次の4つの尺度で評価する。その平均値（評価表の右端の数値）を目標ごとの自己評価とする。

領域	評価の観点	評価項目	番号		実践目標と成果	評価
学校運営	総務	家庭や地域への情報発信	1	実践目標	オープンハイスクール・学校説明会の実施、ならびに総合理学・探究科説明会や予備校・塾の説明会等を通じて、中学生やその保護者・地域へ情報を発信し理解を深める。	3.7
				（成果）	オープンハイスクール・学校説明会を他校に比べ、多く実施し、多くの中学生や保護者に参加していただいた。中学校や塾での説明会にも積極的に参加し、神戸高校の魅力を発信した。	
		学校要覧・学校案内の改訂、諸規定の見直し	2	実践目標	学校要覧や学校案内の内容を改訂する。さらに、各分掌の協力を得て、規定集や内規・申し合わせの見直しを図る。	3
				（成果）	積極的に学校要覧や学校案内を改訂することはできなかったが、新年度のデータ修正などを行った。規定集や内規・申し合わせを次年度に向けて、見直しを行うと同時に年度末に再度、確認を行った。	
		電子掲示板による職員連絡事項の共有の推進	3	実践目標	導入されたグループウェアを活用して、職員朝礼の連絡事項や行事予定などの情報の共有を図る。	3.1
				（成果）	グループウェアを活用して、詳細かつ積極的に情報共有を図った。各教職員のグループウェアを確認する習慣をつけることは課題である。	
		国際交流事業の推進と異文化理解	4	実践目標	海外姉妹校の訪問や受け入れを通して、相互理解を深め友好親善を推進する。また学校の国際交流事業の取り組みを全校生にも紹介し、理解を深める。	2.6
				（成果）	今年度も国際交流はコロナ禍前よりも縮小した内容で実施した。来年度はコロナ禍前同様に実施する方向であるため、準備のための話し合いを行った。	
		防災教育	5	実践目標	防災避難訓練を実施し、人命尊重の精神と安全確保の意識を高め、災害発生時には適切な行動ができる能力を高める。	2.9
				（成果）	防災避難訓練を1回（7月）、シェイクアウト訓練を1回（11月）実施した。教職員、生徒とも話し合って、これまでと違うかたちでの訓練を模索している。	
		生徒委員会の自主的活動の支援と図書館利用の推進	6	実践目標	生徒の自主的委員会活動を支援し、生徒購入希望本の配架や教師推薦図書の案内などを積極的に進める。また、生徒作成の「らいぶ」や「図書館報」により読書への意欲を高める。	3.3
				（成果）	図書館の利用者数も多く、図書委員会からはビブリオ大会で全国大会に出場する生徒も出てきており、読書への意欲は高まっている。	
		創意工夫を生かした実践の展開の場の整備	7	実践目標	探究活動やディベート等による表現活動の支えとなるよう、図書館等の資料の充実・環境整備に努める。	3.2
				（成果）	探究活動等で資料集めなど、図書館を利用する生徒も数多く、資料も充実している。図書の配置の工夫など、環境整備も進んでいる。	
	教務	生徒自らが学び考える力の育成	8	実践目標	新学習指導要領に基づき、2022年度からの教育課程を生徒の実態に応じて編成する。	3.2
				（成果）	新学習指導要領実施前より小委員会を設けて準備してきた教育課程の基本枠を受けて、状況の変化を考慮しながら，本校の実態に即したより効果的な学びを実現するための検討を行った。	
		校務処理の円滑化	9	実践目標	校務支援システムを適切に運用し、教務関連作業等の一元化・正確化・効率化を図る。	3.2
				（成果）	校務支援システムをより円滑で適切に運用すべく学年教務係と連携しながら業務に取り組んだ。考査の自動採点システムの利用も職員間に広がり効率化が進んだ。	
	進路指導	進路指導体制の充実	10	実践目標	前年度の進路状況について、進路指導部がその結果を分析し、職員進路研修会を実施して、全職員に提示し、今後の進路指導について研修する。さらに、3年生は、出願検討会議（12月），共通テスト後出願会議（1月末）を行い、学年・進路指導部で検討を行う。	3.6
				（成果）	5月に新旧3年情報交換会を行い、2022年度入試の分析と本校生の指導に関する情報を交換した。6月の進路指導研修会では、77回生1年基礎学力考査の結果に基づいて過年度比較及び教科ごとに設問別の分析を行い、更に2022年度入試の大学別合否結果について職員間で情報を共有した。3年生については、12月と1月に2回の出願検討会議を行い、生徒個々の出願指導について検討した。3学期には、大学入学共通テストの結果をふまえて問題分析及び出願動向を含めた指導経過及び結果を示し、次年度に向けての指導方針を共有する。	
			11	実践目標	実力考査や模試の結果をもとに、毎回検討会議を開き、生徒の学力の現状を分析し、各教科が今後の授業等の指導に生かす。	3.5
				（成果）	実力考査ごとに検討会議を持ち、(1,2年は年3回、3年は5回)、生徒一人一人の成績から各教科として取り組むべき課題や生徒の弱点を把握し、その後の指導に参考となる情報を共有した。	
		進路意識の向上	12	実践目標	生徒のキャリアアップの一環として、大学の職員及び外部講師を招き大学入試説明会や出前講義を実施する。また、卒業生を中心に、大学生・大学教員を招き話を聞くことで、進路の目標を明確にし、またその実現に向けてどんな道筋や方法があるのかを考えさせ、より強い進路目標の設定の手助けとする。	3.5
				（成果）	7月には大学入試課の職員を招き、文系学部説明会を行い、更に予備校の講師を招き保護者及び生徒対象の医学部医学科説明会を実施し、引き続き11月には医学部系統の面接指導をグループ別に実施し目的意識を高めるとともに今後の対策を学んだ。例年実施しているキャリアアップセミナー(卒業生による在学している大学・学部のプレゼンテーション)は、3学期に実施を予定している。	
			13	実践目標	3年生には、「自己実現」を配布し、1，2年生には、学年集会において、学年進路指導部の協力のもと、生徒に進路情報を提供する。保護者には、保護者会やPTA進路研修会を実施して進路情報を提供し、生徒・保護者の進路意識を高める。	3.6
				（成果）	進路決定の方針や進路に関する情報を中心に3年生向けの進路通信「自己実現」を年間約30号発行した。「自己実現」はホームページにも掲載し、保護者にも情報を提供した。また、6月にはPTA主催の入試に関する研修会(希望保護者・生徒対象)を行い、大学入試の現状と今後の課題について情報を提供した。保護者会については、3年生で2回(7月・12月)、2年生で2回(10月・3月)、1年生で1回(10月)実施し、各学年に合わせた入試情報や進路意識を高める話を行った。	
		主体的な進路選択能力の育成	14	実践目標	「進路ロングホームルーム」を通じて「進路のしおり」の発行や、資料を配付して、職業や大学を計画的に調べさせ、自己認識を深めさせるとともに必要な進路情報を収集し進路選択能力を育てる。	3.2
				（成果）	1年では、1学期のロングホームルームで、職業，学部を研究し、2年は大学の入試科目の研究を行った。さらに1，2年生とも学年進路担当者が中心となって「進路のしおり」を発行した。	
			15	実践目標	各大学から送付されたり、訪問者が持参する資料を整理、開放して、生徒が閲覧・活用しやすいように進路資料室や進路資料掲示板（進路資料室前）の環境を整える。	3.5
				（成果）	各大学からの資料を、生徒が閲覧，活用しやすいように整理して進路資料室を整えた。さらに、進路資料掲示板（進路資料室前）にどの学年の生徒も持ち帰れる大学情報資料を設置した。進路資料室の放課後の利用率も増えている。	
	生徒指導	伝統行事の自主的立案と全校生徒の積極的参加の推奨	16	実践目標	伝統行事の自主的立案と全生徒の積極的参加を奨励し、学校全体を活性化させる。	3.4
				（成果）	コロナ禍の制約は続いたが、自治会執行部のリードのもと合唱コンクールの復活など可能な伝統行事については検討を重ね、実施することができた。	
		自治会の自主的・自治的運営能力の育成	17	実践目	アセンブリー、三大行事に関するフリートーキングの活性化を図る。	3
				（成果）	アセンブリーは自治会の努力により各生徒に意義を認識し、参加する姿勢を持たせることができた。フリートーキングは教員の参加を含めて活性化の努力を続ける必要がある。	
			18	実践目標	リーダーの育成、上級生が後輩を正しく指導する気風を支援する。	3.1
				（成果）	本年はリーダーを育成する機会のある行事で復活したものも多く、自治会執行部や協議会など各部署で引き継ぎの機会を持ち、上級生に下級生を指導させることで円滑な仕事ができるよう努めた。	
		生徒の内面理解を図る生徒指導	19	実践目標	教員相談委員会との連携を密にし、生徒の正しい理解・情報の共有をはかる。	2.9
				（成果）	管理保健部などとの連携を図りながら、また学年には生徒アンケート実施等の協力を得て、全生徒が充実した学校生活を営めるような環境作りを心がけた。	
		問題発生時の危機管理態勢の確立	20	実践目標	問題行動発生時に対するマニュアルを作り、それを教員全体で理解・徹底させる。	2.5
				（成果）	問題行動が発生した際の職員の動きや、対処する際の書式等を再チェックした。	

領域	評価の観点	評価項目	番号		実践目標と成果	評価
学校運営	管理保健	教育相談体制の充実	21	実践目標	教職員のカウンセリング・マインドを深め、生徒理解の資質を高める。支援を必要とする生徒に対しては、特別支援委員会・教育相談委員会を開催し、支援体制作りや職員全体での共通認識を図り、問題解決に向けて保護者および関係機関との連携を図る。	3.1
				(成果)	本校スクールカウンセラーを招聘して，カウンセリングマインド研修を実施。発達障害に関する知見を広めることが出来た。隔週にて特別支援委員会・教育相談委員会を開催し，学年間での情報共有と支援の在り方について検討することが出来た。	
		安全教育の充実	22	実践目標	長期休業前に運動部の生徒を中心とした、生徒や教職員を対象に救急法講習会を行い、心肺蘇生法(AED使用法を含む)および応急手当の知識・技術を習得する。また、熱中症の予防・対応をはじめ、必要な応急処置について学ぶ。	3.4
				(成果)	救急法を専門とされている大学教授を招聘して，長期休業前に救急法講習会を，生徒対象・教職員対象の2回に分けて行った。心肺蘇生法の実技演習や，熱中症などの危機対応についての理解を深めることが出来た。	
		教育環境の向上と美化活動の推進	23	実践目標	日常掃除の見直し・掃除場所・掃除用具の見直しを図り、美化の充実・徹底を図る。	3
				(成果)	校務員・清美委員長と連携して，日常の清掃箇所以外の場所の美化活動や，備品の管理など行った。また，日常掃除・掃除場所を見直しも行った。	
	総合理学・探究	総合理学科のカリキュラムの充実	24	実践目標	グローバル人材育成をめざし、コアになる力としての「問題を発見する力」「未知の問題に挑戦する力」「知識を統合して活用する力」「問題を解決する力」、ペリフェラルとしての力としての「交流する力」「発表する力」「質問する力」「議論する力」の8つの力をよりよく伸張するための授業改善を図る。	3.5
				(成果)	8つの力の育成は，総合理学科の中心の目標である。この目標の達成を目指して今年度は，コロナ禍の影響が緩和されたこともあり，予定していた活動や発表会等を従来通りに近い形で行うことができた。また，各教科も実験機材や発展的内容を含めた教材を活用した授業展開を行うことができた。	
		創意工夫を生かした探究活動等の実践	25	実践目標	交流・議論・発表等を軸とした生徒の主体的・協働的な研究活動・探究活動の効果的なカリキュラムの開発とその実践を行う。	3.5
				(成果)	外部人材の活用を積極的に行い，サイエンス入門や課題研究では，いろんな視点からの助言をいただき，生徒自らの研究活動に生かすことができた。また，SSH特別講義やSSH特別実験会およびSSH通信による各種プログラムの案内などもできるだけ行い，主体的・協働的な活動へにつながる機会を多くした。そして普通科の神高探究の理数系テーマを「サイエンス探究」として，SSH事業の対象として支援した。	
		在校生と中学生、その保護者への総合理学科の広報	26	実践目標	在校生とその保護者に対しては、保護者会やSSH通信や神戸高校ホームページを活用して広報をおこなう。また、中学生とその保護者には、総合理学科説明会や校外での説明会で、学科の特色や魅力を説明し、理解を深めてもらう。	3.6
				(成果)	総合理学科説明会を行い，その中で総合理学科3年生の各班から研究発表を含めた活動の説明も行い，中学生やその保護者に丁寧な広報を行うことができた。また，校外での広報活動も行い，参加された中学生やその保護者に，本校のホームページの紹介，SSH通信などSSH事業を含めた本校および総合理学科の育成目標や活動内容を詳しく説明した。在校生においてもSSH通信等を通じて各種プログラムの案内を行った。	
		SSH事業の推進と成果の全国への普及	27	実践目標	神戸高校サイエンスアドバイザーなど外部人材の活用で人材育成の効果をさらに高める。 SSHの取組で得られた成果を普通科生徒や県内他高校へ波及させる。 科学技術人材育成に係る実践事例として、Webページを利用しその取組を全国に情報発信する。	3.5
				(成果)	サイエンス入門・課題研究・神高探究等の探究活動，科学英語等の授業，SSH特別講義や外部施設への見学なども一部を再開でき，リモートも含め，多様な外部人材を活用することができ，人材育成の効果を高めることができた。SSH特別講義やSSH特別実験会も多く行い，全校生が参加できる企画を実施した。SSH事業普及のwebページも随時更新を行い，閲覧数も増加し，全国へのSSH事業の普及として発信した。	
学□□校□□運□□営	学年経営	1学年	28	実践目標	神戸高校生としての自覚を持たせ、基本的生活習慣と礼儀・マナーの確立を図る。生徒の現状を把握し、家庭との連携を密にして、生徒の個別対応を大切にした指導を行う。	3.3
				(成果)	新入生オリエンテーション、学年集会、HR等で神戸高校生として意識していきたいことを伝える。年度当初や夏の三者面談、必要に応じて面談を行い、個別対応の成果をあげている。	
			29	実践目標	中学時の意識を切り替えて、神戸高校の授業に慣れさせる。そのために、適切な課題に取り組ませたり、予習・復習を習慣化させる。個々の学習目標を意識させ、iPadも活用して個々の状況に応じた自主的で主体的な学習のあり方についても考えさせる。	3.4
				(成果)	入学前後に世話係から神戸高校生の精神・生活や学習などについて教授を受け、各自の活動に活かし、学校生活の基礎としている。週末課題や考査前、長期休業中に適切な課題を与え、成果をあげるとともに、授業などで適切にipadを使用し、効果を上げている。	
			30	実践目標	学習と合わせて、部活動や学校行事に、自主性・自律性の涵養を図りながら意欲的に取り組ませ、一人一人が生き生きとした学校生活が送れるよう適切に指導・助言を行う。	3.3
				(成果)	学習だけでなく、部活動や学校行事(体育大会や合唱コンクールなど)にも積極的に取り組み、大いに成果を上げている。ポートフォリオの取り組みで、行事などを振り返り、深く学び、反省し、学校生活をさらに充実したものになっている。	
		2学年	31	実践目標	授業を中心に据えて予習・復習を習慣化させることで、基礎学力定着の徹底を図る。「知識」を「知恵」に昇華させ、「深い学び」を追求する姿勢を身に付けさせる。	3
				(成果)	各教科において予習・復習を習慣化させ、週末課題や小テスト等を積極的に取り組ませることにより、学習習慣が身につき、基礎学力の定着が身についてきている。夏季休業中に補習を行い、また神高探求や課題研究の取り組みなどを通じ、学習意欲を高める指導を行い、成果を上げている。	
			32	実践目標	自治会や部活動など学校生活を推進する面で、中核となる学年であることの自覚を持たせる。「自重自治」の精神に基づいてリーダーシップを発揮できるよう、また他者との共生の精神を培うよう指導する。	3.3
				(成果)	自治会執行部も75回生より引き継ぎ、園遊会や体育大会、音楽会などの行事において、中核としてリーダーシップを発揮していた。また部活動においても中心として活動し、横のつながりを大切にし、下級生と連携もしっかり取りながら活動していた。	
			33	実践目標	集団活動・個人活動を問わず、あらゆることに積極的に取り組ませ、社会の変化に対応する能力や態度の育成を図り、助言・指導を行う。	3.1
				(成果)	学年集会やLHR活動の中で、社会の変化に対応するための様々な能力や態度・姿勢の土台となるものを考えさせた。また、ポートフォリオを継続し、機会があるごとに学習活動や行事の記録をとることを習慣づけた。	
		3学年	34	実践目標	最高学年としての責任感をもって、諸学校行事に取り組ませる。本校の教育活動を大切にして、神高生として相応しい学校生活を心がけるように指導する。	3.1
				(成果)	部活動を最後までやり遂げるとともに、学校行事への参加や清掃など日常の高校生活を大切にさせるようにした。	
			35	実践目標	ウイークエンドセミナーや学期中・夏季休業中の補習の実施、などによって自主的な学習態度を育成し、学力の飛躍的向上を図る。3学期の学習の支援を行い、学力の更なる向上を図る。	3.1
				(成果)	学習状況を把握し個々の学習への取り組み方を考えさせた。ウィークエンドセミナーや休業中・放課後・2月補習等の実施により、学力の更なる向上を図った。	
			36	実践目標	個人面談や三者面談を通じて、「自身が大学で何をなすのか」について考えさせた上で希望進路を確定させ、「第一志望大学合格」の意志を定着させる。進路保護者会や「自己実現」の発行を通して入試制度や大学の情報を知らせ，保護者の協力と理解を得て、第一志望校への出願を図る。	3.3
				(成果)	二者・三者面談を複数回行って進路を考える支援をした。早期から「第一志望大学」の目標を設定し学習に取り組ませることで、学力向上を図った。進路指導部の協力のもと進路情報を保護者と共有することに努めた。	

領域	評価の観点	評価項目	番号		実践目標と成果	評価
課題教育	人権教育	人権教育推進体制の確立と人権教育の推進	37	実践目標	人権教育をホームルーム活動をはじめとして全ての教育活動に位置づけ、全教職員で取り組む	2.8
				(成果)	複数回の人権アンケートを行い、生徒の状況把握に努めた。ソーシアルディスタンスを保ちつつ講演会や映画鑑賞を行い、人権意識の向上を促進した。	
	情報教育	情報活用環境の整備とICT機器の活用支援	38	実践目標	教育実践の効果を高めるために、情報を活用する環境を整備し、ICT機器の活用を推進するとともに，技術的な支援を行う。	3.2
				(成果)	近年は毎年ネットワークの設定変更や機器の導入が続き，セキュリティの規則や調査も多く，教育以外の業務が増加している。必要な処理は実施し続けているが，全教員の知識の充実と行動が更に必要な状況である。 今年度の大きな問題点は，県ネットワークに関して県教委による不具合の修正が放置され続けたことから，ワクチンソフトの多くが正常に動作しなくなり，放置期間が長かったことが原因で校内PCの復旧処理の多くは個別に手作業で実施しなければならなくなった。12月末の時点でやっと復旧処理を開始できる状況となったが，今後相当な時間が必要である。 他の整備や活用推進については，生徒が授業や部活動等で使用するPCの不具合対応や設定更新，新たな配布等は継続的に実施し続けた。	
		生徒の学習活動を家庭・地域へ情報発信	39	実践目標	日常授業や特色ある学校行事の主たるものをWebなどで広報する。	3.1
				(成果)	本校Webの発信回数は複数記事の同時発信も1回と数えて，計114回(2022年1月から12月まで順に9回，4回，13回，9回，12回，16回，12回，8回，10回，6回，9回，6回)であった(2021年は138回，2020年は144回，2019年は100回)。今年度はコロナウイルスの影響によるWebを利用した情報提供は収束したが，それ以外の多くの広報にWebが活用された。一時期レンタルサーバーの大規模な更新が原因で，CMSを利用したWebシステムが動作しなくなったが，現在はほぼ復旧できて広報活動が正常に戻ったといえる。また，「SSH成果の普及サイト」も同様の問題が生じたが，情報発信の効果は継続しているだろう(分析はSSH報告書に掲載する)。	
	特別支援教育	特別な配慮を必要とする生徒への支援	40	実践目標	生徒の実態把握や具体的な対応策の検討により、教職員の実践力を高め、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた合理的配慮ある支援を行う。	3
				(成果)	隔週で特別支援委員会を開催し、特別な支援を要する生徒の情報交換を行い、個に応じた対応を行った。	
		国語	41	実践目標	論理的な文章の読解を通じて、思考力・判断力を養う。また文学的な文章の鑑賞を通して豊かな心を育てる。	3.3
				(成果)	教科における学習活動全般を通じて、論理的な文章や文学的な文章を読解するために必要な国語力の定着を図った。また、観点別評価によって個々の特性を理解しつつ、さまざまな領域に関する思考を深め、多様な表現を味わわせ、活発な言語活動を引き出すことに努めた。	
			42	実践目標	古文・漢文読解の基本となる知識の定着を図りつつ、さまざまな作品にふれることを通して、古典への関心を育てる。	3.3
				(成果)	教科における学習活動全般を通じて、古典の基礎的な知識や読解力の定着を図るとともに、観点別評価によって個々の特性を把握しつつ、多くの作品を読むことを通して古典に親しみ、古典を尊重する態度を身につけさせることに努めた。	
		地理歴史・公民	43	実践目標	現代をよりよく生きるために、政治・経済の仕組みや、現代世界の理解を深める。学習を通じて、基本的な知識を身につけ、物事を見つめる力を育てる。	3.4
				(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用し、必要な情報を提供することで、理解を深めることができた。	
			44	実践目標	日本の歴史、世界の歴史を学び、現代社会における国際問題を考える基本知識を習得する。	3.4
				(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用し、地図や資料など必要な情報を提供して、わかりやすい授業を実施し、理解を深めることができた。	
			45	実践目標	日本の社会・風土の理解を深めるため、各国の自然環境・社会環境を学び、基本知識を習得する。	3.4
				(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用し、地図や資料など必要な情報を提供して、わかりやすい授業を実施し、理解を深めることができた。	
		数学	46	実践目標	数学的な考え方を身につけさせ、生徒が主体的・能動的に学習する態度を育てる。	3.2
				(成果)	生徒が興味をもつような補助教材を用意したり，グループワークを取り入れ，生徒が主体的に学び考え，能動的に発表・意見交換ができる授業を展開した。	
			47	実践目標	生徒の進路・能力・適性に応じた授業・補習・課外活動を実施する。	3.4
				(成果)	3年では，すべてのクラスについて一部の授業で能力別・進路別のクラス分けを行った。1，2年でも生徒の学力にあわせた授業・補習・補充を行った。	
			48	実践目標	生徒の興味・関心・意欲を抱けるような教材・教具を工夫し活用する。	3.1
				(成果)	ICTやタブレットを用いて，図形や関数を，動的に表現することで，興味関心を抱けるようにし，理解を深めることが出来た。	
		保健体育	49	実践目標	スポーツテスト等を実施し、生徒が自己の体力の現状を知ることにより、3年間を通じて体力の向上を図る。	3.1
				(成果)	男女、各学年とも高い数値を示している。男子は立ち幅跳び以外において平均よりも高く、中でも持久走で高い数値を示している。女子は立ち幅跳びとハンドボール投げ以外は平均よりも高い数値で、男子同様に持久走で高い数値を示している。	
			50	実践目標	選択種目を通じて生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる。	3.3
				(成果)	各学年において多様な選択種目を設定しており、生涯スポーツにつながるように、生徒の興味・関心にできる限り沿う形で授業を行っている。そのため、生徒の意欲・関心は非常に高く、熱心に、かつ楽しく活動できた。また体力・技術もも学年進行に伴って年々、高まっており、意欲・関心と共に相乗効果で高まっている。	

領域	評価の観点	評価項目	番号		実践目標と成果	評価
教科領域	教科	理科	51	実践目標	自作プリント教材を活用した授業実践と授業内容の工夫を行い、基礎学力および応用力の向上を図る。	3.2
				(成果)	生徒は授業に積極的に参加し、グループワークなどでも活発に意見を交わした。基礎知識を定着に加え、発展問題に対しても意欲的に取り組んだ。	
			52	実践目標	実験・観察を行いレポートを書かせ、知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力の向上を図る。	3.2
				(成果)	実験では反転学習も取り入れ、生徒たちはしっかりと予習した上で授業にのぞみ、より理解が深まった。またレポートも研究活動につながる視点で書かせるよう心がけた。	
			53	実践目標	工夫された教具、ICT教材等を活用し、科学・技術に対する幅広い興味・関心を持たせる。	3.1
				(成果)	タブレット端末を活用した反転学習や、授業の中で動画やアプリを用いた教材、クリッカーなどを効果的に取り入れ、生徒の興味関心を高めることができた。	
		芸術	54	実践目標	生涯にわたって広い視野に立った芸術との関わりを大切にしようとする心情を持ち、実技・実習等幅広く主体的に取り組む姿勢を育てる。	3.1
				(成果)	教材を精選し、充実した内容で実践できるように努めた。どの教材にも興味関心を示す生徒が多く、積極的な姿勢で実技や実習に取り組み、活発な活動ができていた。	
		外国語(英語)	55	実践目標	教科指導を通して、国際感覚を持った人材育成に努める。	3.2
				(成果)	教科の指導の中で、英語を読む、聞くなどのインプット活動だけでなく、英語での意見の記述・プレゼン、議論・会話など、多くのアウトプット活動を経験させた。多様な考え方や文化的背景を持った人達と議論をする力、アサーション能力などを磨いた。また、教科書の題材に触れることを通して、国際的な視野を広げた。	
			56	実践目標	生徒のニーズに配慮した授業や個別指導を通して、学力の向上と定着を図る。	3.2
				(成果)	個々の生徒の考査結果や、提出の状況、普段の授業の様子などに気を配り、授業の内容、方法の改善を行ってきた。こまめな声掛けを通して、勉強に向かう意識が高まるようにした。	
			57	実践目標	外国人外国語指導助手や視聴覚教材を有効に活用し、4領域(読む、書く、聞く、話す)の養成に努める。	3.3
				(成果)	英語Tの授業を中心として、積極的なALTの活用を行っている。また、それだけでなく、暗唱大会、スピーチコンテスト、ディベートコンテストなどの参加生徒に対する指導も積極的に加わってもらっている。視聴覚教材に関しては、教室のプロジェクタを積極的に活用して、オーセンティックな教材の提供を積極的に行った。	
		家庭	58	実践目標	社会の一員として、より良い人生を築くために必要な基礎的・基本的知識・技術を習得し、「生きる」力を身につける。持続可能な社会を形成し、消費者の立場として地域社会に貢献する力を養う。また、新しい生活様式に対応するために、生活の工夫ができる力を養う。	3
				(成果)	学習活動全般を通じて、持続可能な消費生活の実現に関連付けた内容を取り上げ、考察ができるように学習活動を進めた。主体的な消費者として適正な商品を選び消費することが、社会全体の消費行動に繋がることに気付くことができた。	
			59	実践目標	実験や実習などを通して実践力を育み、ものごとを構成する力や、論理的・科学的な思考を育成する。また、グループワークなどで自分の考えを表現できるようにする。	3
				(成果)	実験や実習、講義の中で、グループで意見交換を行い、様々なものの見方や考え方があることを共有する機会を積極的に取り入れた。多角的な視点で考えることの大切さを実感できた。	
			60	実践目標	外部講師の専門的な講義を活用し、将来の生活設計を考える力を養う。また、日本の食文化を実習の中で体得し、伝統文化を育む。	3
				(成果)	金融教育、食生活分野で外部講師とのTT授業を例年より多く取り入れた。実際にその分野の専門的な立場の講義や実技を受講することで、学習への意欲がより高まった。食分野では、日本の伝統食を取り上げて講義や実習することで、文化を大切にする心を育むことができた。	
		情報	61	実践目標	情報を科学的に理解させつつ情報及び情報技術の活用能力を高めるとともに、情報社会に参画する態度を学ばせる。	3
				(成果)	JSTの方針「SSH事業の成果の普及」に沿って「問題解決」や「探究活動への接続」を重視しつつ，今年度は更に共通テストへの対策も視野に入れて授業を展開した。既に「夏休みに生徒がネット上の問題を起こしたり巻き込まれる事例が発生しにくい」成果が得られている「情報社会に参画する態度」関連の内容を1学期に指導した。「科学的な理解」をねらいとする論理演算・しくみ・デジタル表現・ネットワークの理論等は実施中であり，「問題解決や探究活動」を踏まえた理論・統計的手法を教科書の内容を超えて3学期に指導する。今年度から指導すべき内容が増えており，授業時間数が少なく厳しい状況であるが，情報を礎にした知識・技能・思考判断力の重要度が高まっている現状を踏まえて，データ分析・モデル化・シミュレーション等の講義やPC活用実習も指導中である(全て12月時点の途中段階の成果)。	
		総合的な探究の時間(神高探究)の展開と活用	62	実践目標	自らの興味・関心に応じてテーマを設定、探究活動を行うことで探究の方法、考え方、知識等を身につけさせる。また、グループ活動を通して協働性を養い、発表会などを通して外部へ発信するプレゼンテーション能力を育成する。	3.4
				(成果)	今年度までになるが，2学年では1学期に神高探究のプロジェクト探究Ⅰとして，探究活動の流れを学習した。1学期末からプロジェクト探究Ⅱとして，本格的な探究活動を行い，8クラス71テーマとなった。中間発表や最終発表会および代表の外部の発表会を通じて8つの力の目標の育成となり，協働性やプレゼンテーション能力の修得になった。また，今年度から1学年に神高探究Ⅰとして，上記プロジェクト探究Ⅰの内容を取り込み，プレ課題研究とその発表会も実施し，来年度2学年での神高探究Ⅱにつながる学習となり，上記の実践目標の基礎ができた。	